

長岡京市文化財調査報告書

第 68 冊

2015

長岡京市教育委員会

編集 公益財団法人 長岡京市埋蔵文化財センター

長岡京市文化財調査報告書

第 68 冊

2 0 1 5

長岡京市教育委員会

編集 公益財團法人 長岡京市埋蔵文化財センター



(1) 右京第1084次 1トレンチ段丘疊層を掘り込む溝（東から）



(2) 井ノ内車塚古墳第7次 中央トレンチ完掘状況（南西から）

序 文

私たちの長岡市は、豊かな水と緑に恵まれた良好な環境と大都市を結ぶ交通の利便性により発展してきたまちです。

古くは旧石器時代から人々が生活を営んだことがわかつており、特に8世紀後半には、「長岡京」という当時のわが国の都が置かれた地として全国的に知られています。

また、市内には惠解山古墳をはじめとした首長墓や、勝龍寺城などの城館跡、乙訓寺・長岡天満宮といった神社仏閣など、数多くの文化遺産が点在し、現代に至るまで豊かな歴史と文化を守り育んできました。

しかし、こうした遺跡は、まちの発展の一方でかつての姿が失われつつあります。本市では、これらの遺跡の調査・保護に力を入れるとともに普及・啓発に努め、地域全体で風土や文化遺産を守るまちづくりを進めています。特に今年度は、その一環で復元整備を進めてきた史跡惠解山古墳が、史跡公園として盛大に開園を迎えることができました。

さて、本報告書は、平成26年度に長岡市教育委員会が実施した東神足地区・井ノ内地区・下海印寺地区における発掘調査の成果をまとめたものです。調査は長岡京の全容解明を目的として実施したものですが、あわせて東神足地区では勝龍寺城の土壘・空堀跡の構造解明、井ノ内地区では乙訓地域の首長墓系譜を考えるうえで重要な井ノ内車塚古墳の規模や形状の把握、下海印寺地区では繩文時代中・後期の伊賀寺遺跡縁辺の状況確認を行いました。

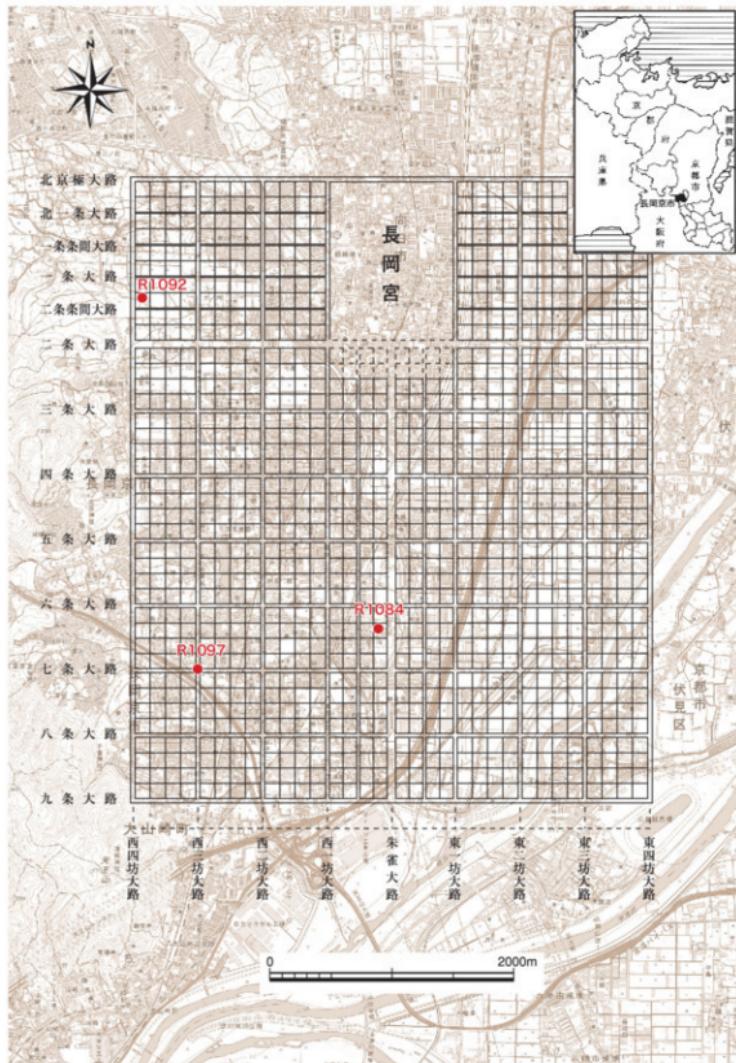
最後になりましたが、発掘調査にあたり数々のご助力をいただきました土地所有者や地元協力者の方々、ご指導・ご助言をいただいた諸先生方並びに調査を担当していただいた公益財団法人長岡市埋蔵文化財センターなどの関係機関に深く感謝いたします。

本書が文化財の普及・啓発の一助となり、また地域学習の資料として広く活用いただければ幸いです。

平成27年3月

長岡市教育委員会

教育長　山　本　和　紀



第1図 長岡京と調査地の位置 (1/40000)

凡　　例

1. 本書は、長岡市教育委員会が平成26年度に国庫補助事業として公益財団法人長岡市埋蔵文化財センターに事業を委託して実施した発掘調査に関する概要報告である。
2. 調査対象地は、第1図および付表-1に表示した。
3. 長岡京跡の調査次数は、右京城と左京城に分けて通算したものである。また、調査地区名は、前半が奈良文化財研究所の遺跡分類表示、後半が京都府教育委員会『埋蔵文化財発掘調査概報』(1977年)収録の旧大字小字名による地区割りと同地区内における調査回数を示す。
4. 長岡京跡の条坊名称は、山中章「古代条坊制論」『考古学研究』第38巻第4号(1992年)の復原案に従った。
5. 本書で使用する地形区分は、特に断らない限り「長岡市域地形分類図」「長岡市史」資料編一(1991年)によった。
6. 本文の(注)に示した長岡京に関係する報告書のうち、使用頻度の高いものについては、『長岡市埋蔵文化財調査報告書』第2集(1985年)に従って略記した。
7. 本書において使用している遺構番号は、長岡京跡に関する調査の場合、調査次数+番号であるが、煩雑さを避けるため、調査次数を省略している。「SD01」の場合、調査次数を冠した「SD ○○○ 01」が正式な番号である。
8. 本書で使用している方位と国土座標値は、旧座標系の第VI系によっている。
9. 本書の挿図の土層名で〈〉を付けて表示した記号は、『新版標準土色帳』(1997年版)のJIS表記法による土色名である。
10. 本書の執筆は、各章のはじめに氏名を記し、編集は公益財団法人長岡市埋蔵文化財センターの原 秀樹が行った。

付表-1 本書報告調査地一覧表

調査次数	地区名	所在地	現地調査期間	調査面積	備考
長岡京跡右京 第1084次	7ANMKI-10	長岡市東神足二丁目地内	2014年6月23日 ～ 2014年8月15日	68m ²	神足遺跡 中世勝龍寺城跡 神足城跡
井ノ内車塚古墳 第7次 長岡京跡右京 第1092次	7ANGKT-8	長岡市井ノ内向井芝4	2014年8月28日 ～ 2014年10月17日	78m ²	井ノ内車塚古墳
長岡京跡右京 第1097次	7ANOOD-15	長岡市下海印寺下内田23番地	2014年11月4日 ～ 2014年11月26日	56m ²	伊賀寺遺跡

本文 目 次

第1章 長岡京跡右京第1084次（7ANMKI-10地区）調査概要

1	はじめに		1
2	調査経過		2
3	検出遺構		3
4	出土遺物		6
5	まとめ		8

第2章 井ノ内車塚古墳第7次調査概要

—長岡京跡右京第1092次（7ANGKT-8地区）調査—

1	はじめに		9
2	調査経過		10
3	検出遺構		14
4	まとめ		24

第3章 長岡京跡右京第1097次（7ANOOD-15地区）調査概要

1	はじめに		25
2	調査経過		25
3	検出遺構		26
4	出土遺物		28
5	まとめ		28

卷頭図版

卷頭図版 (1) 右京第1084次 1トレンチ段丘疊層を掘り込む溝（東から）

(2) 井ノ内車塚古墳第7次 中央トレンチ完掘状況（南西から）

図 版 目 次

長岡京跡右京第 1084 次調査

- 図版1 1 ドレンチ土塁内に埋没する溝 SD02 と空堀（南東から）
 図版2 (1) 2 ドレンチ土坑 SK01 の石礫（西から）(2) 3 ドレンチ空堀内の埋め戻し土（南西から）
 図版3 3 ドレンチ空堀の南壁と東壁土層（北西から）
 図版4 4 ドレンチ土塁構築土と南堀の溝 SD03（南から）
 図版5 (1) 5 ドレンチ石礫の堆積状況（南西から）(2) 5 ドレンチ石礫の堆積状況（北西から）

井ノ内車塚古墳第 7 次調査（長岡京跡右京第 1092 次調査）

- 図版6 (1) 井ノ内車塚古墳全景（北西から） (2) 中央ドレンチと北ドレンチ（南西から）
 図版7 (1) 北ドレンチ完掘状況（北西から） (2) 北ドレンチ完掘状況（南東から）
 (3) 北ドレンチ盛土と周溝（南東から） (4) 北ドレンチ周溝遺物出土状況（南東から）
 図版8 (1) 中央ドレンチ完掘状況（南から） (2) 中央ドレンチ完掘状況（北東から）
 (3) 中央ドレンチ完掘状況（南西から）
 図版9 (1) 中央ドレンチ造り出し上面と西辺（北から） (2) 中央ドレンチ北辺の埋土（南西から）
 (3) 中央ドレンチ南辺の周溝埋土（北東から）
 図版10 (1) 中央ドレンチ造り出し盛土と周溝埋土（南から）
 (2) 中央ドレンチ遺物出土状況（北から）
 (3) 中央ドレンチ遺物出土状況（北から）
 図版11 (1) 南ドレンチ完掘状況（北東から） (2) 南ドレンチ完掘状況（西から）
 (3) 南ドレンチ周溝遺物出土状況（北から）

長岡京跡右京第 1097 次調査

- 図版12 (1) 調査区全景（南から） (2) 調査区全景（北から）
 (3) 小穴 P7 遺物出土状況（南から）

付 表 目 次

付表-1 本書報告調査地一覧表	iii
付表-2 井ノ内車塚古墳の調査履歴	10
付表-3 報告書抄録	29

挿 図 目 次

第 1 図 長岡京と調査地の位置 (1/40000)	ii
長岡京跡右京第 1084 次調査	
第 2 図 発掘調査地位置図 (1/5000)	1
第 3 図 トレンチ配置図 (1/500)	2
第 4 図 1 トレンチ検出遺構図・土層図 (1/80)	3
第 5 図 2 トレンチ検出遺構図・土層図 (1/80)	4
第 6 図 3 トレンチ検出遺構図・土層図 (1/80)	4
第 7 図 4 トレンチ検出遺構図・土層図 (1/80)	5
第 8 図 4 トレンチ作業風景 (北から)	5
第 9 図 5 トレンチ検出遺構図・土層図 (1/80)	6
第10 図 出土遺物実測図 (1/4)	7
井ノ内車塚古墳第 7 次調査 (長岡京跡右京第 1092 次調査)	
第11 図 発掘調査地位置図 (1/5000)	9
第12 図 調査区配置図 (1/400)	10
第13 図 墳丘と調査全体図 (1/200)	11・12
第14 図 中央トレンチ作業風景 (南から)	13
第15 図 中央トレンチ埋め戻し風景 (南西から)	13
第16 図 北トレンチ東半部の状況 (東から)	14
第17 図 北トレンチ西辺部の状況 (北西から)	14
第18 図 北トレンチ検出遺構図・土層図 (1/50)	15・16
第19 図 中央トレンチ北壁西半の状況 (南から)	17
第20 図 中央トレンチ土層図 (1/50)	18
第21 図 第6次調査2トレンチ・第7次調査中央トレンチ検出遺構図 (1/50)	19・20
第22 図 中央トレンチ造り出し土層図 (1/50)	21
第23 図 南トレンチ北壁の状況 (北西から)	22
第24 図 南トレンチ土層図 (1/50)	23
第25 図 南トレンチ検出遺構図 (1/50)	23
第26 図 向日丘陵から井ノ内地域の竹薮を望む (北東から)	24
長岡京跡右京第 1097 次調査	
第27 図 発掘調査地位置図 (1/5000)	25
第28 図 発掘調査前風景 (南東から)	26
第29 図 発掘作業風景 (南南西から)	26
第30 図 調査区検出遺構図・土層図 (1/100)	27
第31 図 小穴 P7 実測図 (1/20)	28

第1章 長岡京跡右京第1084次(7ANMKI-10地区)調査概要 —長岡京跡右京七条一坊二町、神足遺跡、中世勝龍寺城跡、神足城跡—

1 はじめに

- 1 本報告は、平成 26(2014) 年 6 月 23 日から 8 月 15 日まで、長岡市東神足二丁目地内において実施した中世勝龍寺城跡・長岡京跡・神足城跡・神足遺跡に関する調査概要である。
 - 2 本調査は、神足公園の整備事業に伴い、中世勝龍寺城跡の残存遺構を活かして整備する目的で実施したものである。調査面積は 68m²である。
 - 3 調査地は、長岡京跡右京七条一坊二町の推定地で、旧石器～鎌倉時代の神足遺跡にも重複しているため、これらに関わる範囲確認調査としての目的も兼ねていた。
 - 4 発掘調査は、平成 26 年度国庫補助事業として、長岡市教育委員会から委託を受けた公益財團法人長岡市埋蔵文化財センターが実施し、現地調査は同センターの原秀樹が担当した。
 - 5 発掘調査に当たっては、地元自治会、近隣住民、神足神社、神足公園利用者に深いご理解と種々のご協力をいただいた。
 - 6 本報告の、編集と執筆は原が行った。



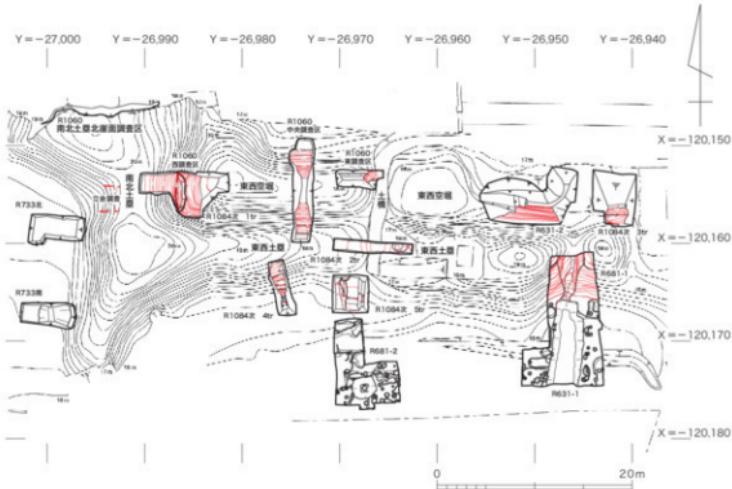
第2図 発掘調査地位図(1/5000)

2 調査経過

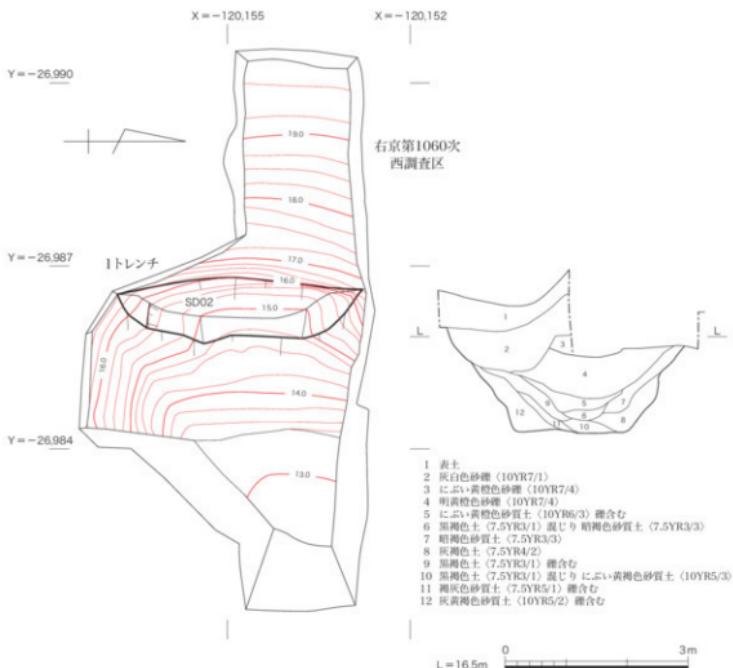
調査地は、JR 長岡京駅の南東約 400 m に位置する。周囲は住宅と店舗、神足公園と神足神社境内に隣接しており、調査対象地は竹林とエノキなどの落葉高木がうっそうと繁る。本地点に遺存する土を盛り上げて築いた土塁と浅い凹みとして残る空堀は、以前は神足神社参道を越えて東へ延びていたが、すでに住宅開発により消滅した。中世の勝龍寺城跡の遺構は、平成 4(1992)年に都市公園化された本丸、沼田丸と、調査対象地の土塁、空堀のみとなった。これらの遺構は、江戸時代の絵図や近代の地図などから、元亀 2(1571)年に細川藤孝が行った勝龍寺城の大がかりな改修時の姿をとどめるものであり、広い敷地を取り囲む土塁と空堀の内部では地下に埋もれた堀や井戸、多量の遺物等が発見されている。この一帯は、市街地に残る戦国時代の貴重な文化財を有する地域である。

神足公園の拡張整備計画では、土塁上に見学通路を設けて、周囲を見渡すことができる構造となっている。今回の調査は、公園整備前の最後の機会となることから、昨年度の発掘調査で浮き彫りとなった問題点や新たに指摘された課題を明らかにすることを第一義に実施した。

5カ所の調査区を設定し、竹や樹木の伐採と搬出を済ませた後、重機と人力による掘削を進めた。これまでに実施した土塁と空堀に関する発掘および立会調査は第3図のとおりである。調査中は、平成 26 年 8 月 2 日に現地説明会を開催し、約 120 名の参加者があった。



第3図 トレーンチ配置図 (1/500)

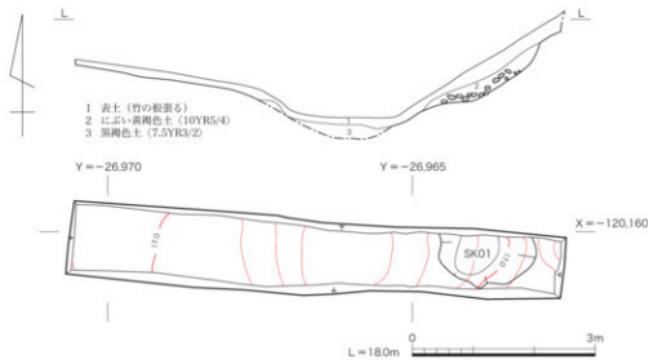


第4図 I ブランチ検出遺構図・土層図 (1/80)

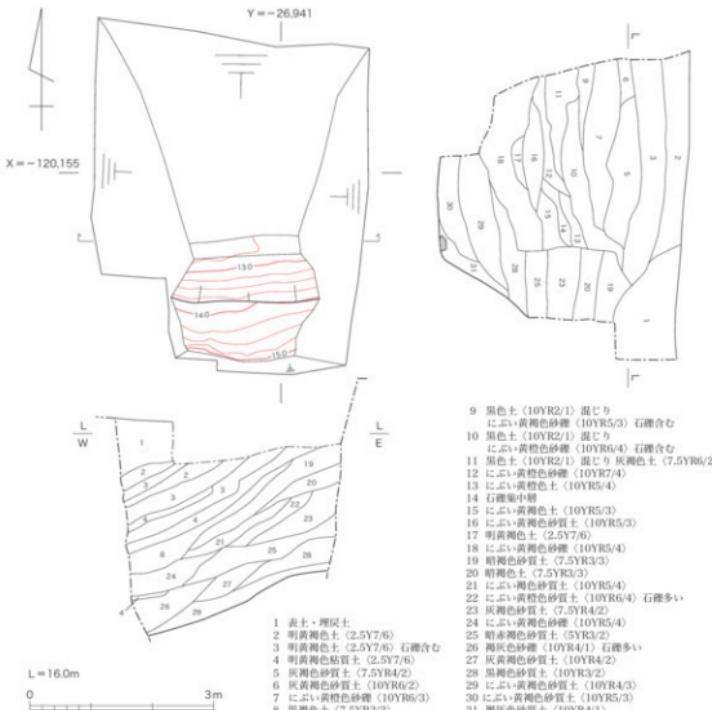
3 検出遺構

1 ブランチ 昨年度の調査で、南北土塁に設けた西調査区から土塁構築以前に段丘礫層を掘削する掘り込み SD02 が検出された。土塁頂部から空堀底まで高低差 6.5 m の縦断面は壯観であり、掘り込み SD02 は調査区の真ん中あたりに北半分の断面形を現していた。今回の調査は、この掘り込みの全容を明らかにするため、空堀底から土塁上部まで埋め戻した土壠を取り除き、可能な限り南側へ拡張を行った。掘り込み SD02 は、幅 3.9 m、深さ 1.4 m。断面形状は底が平らな逆台形を呈する。底面の標高は 14.8 m。空堀底との比高は約 2 m である。遺物は出土していないが、空堀の底からまとまって戦国期の土師器皿が出土した。すでに指摘される通り、立会調査で確認された地山層を切り込む東西溝が、本地点の溝と繋がることはほぼ間違いないとみられる。

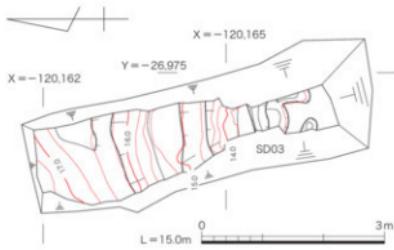
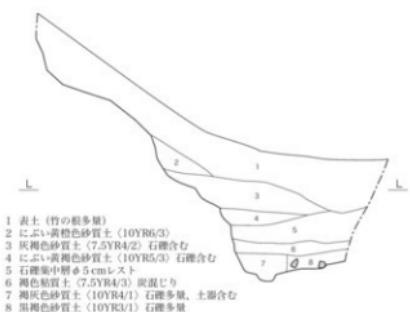
2 ブランチ 空堀から土橋を渡った土塁東側の頂部には菊一桶荷と呼ばれる小さな祠が鎮座していた。調査区は、祠の手前から西側の土塁頂部にかけて、土橋と東西土塁が交差するところにあたる。東側土塁の斜面中程には、多量の石が投棄された凹みがあり、中から狐の土人形や茶碗、



第5図 2トレンチ検出遺構図・土層図 (1/80)



第6図 3トレンチ検出遺構図・土層図 (1/80)



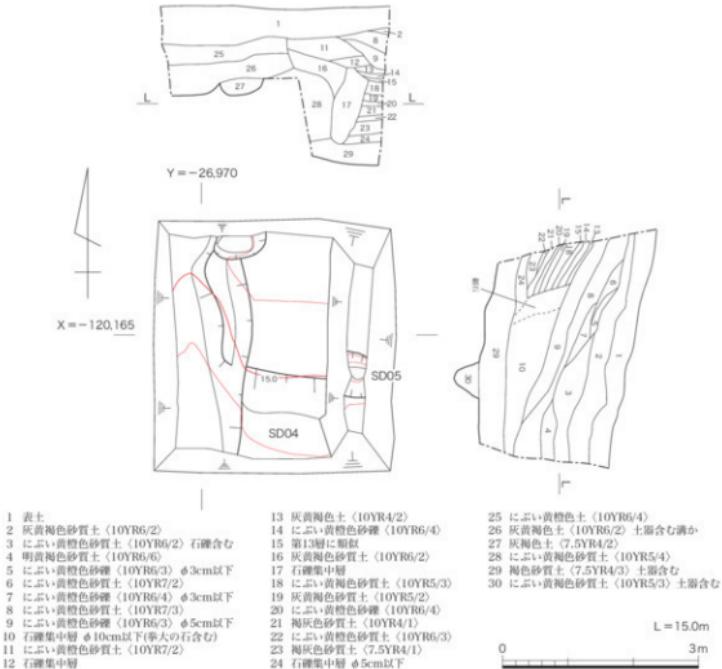
第7図 4トレンチ検出遺構図・土層図(1/80)



瓦などが出土した。祠で使われていたものが廃棄されたようである。土塁表土を剥ぐと黄橙色と黒色土が交互に盛られた盛土層が観察できる。

3トレンチ 東西土塁と空堀が神足社参道で途切れた空堀内に設定した。現在は埋もれて浅い凹みに見えるが、本来は相当に深い。隣接する空堀内の調査では、おおむね現代のゴミを含む埋め戻し土、近世以後の堆積層と、土塁の崩落土に分けられる。埋め戻し土の中には食品関係の空瓶が多く投棄されていた。本地点は、空堀が北へ折れるように東から西へ傾斜しており、さらに上層部分のみ石礫混じりの堅く締めた黄褐色の土を被せている（第6図第2～4層）。意図的に土を選別していると思われる。最終的に埋め戻された土の下層から江戸時代の瓦、土師器、陶磁器、狐の土人形、戦国期の土師器、長岡京期の須恵器などが出土した。江戸時代のある時期に空堀を一部埋める必要が生じたためと考えられる。当初は、木の根が障壁となり地山を切り込む空堀南壁面を検出できなかつたが、調査終盤で一部埋め戻した後に空堀底面と南壁を部分的に確認することができた。空堀底面の標高は 12.8 m。

4トレンチ 東西土塁の南斜面を縦断する調査区を設定した。土塁表土を剥ぐと、黄橙色と黒色土が入り混じる構築土が観察できる。土塁裾部には多量の石礫が厚く堆積しているが、土塁構築土にはそれほど多くの石礫は含まれないことから、崩落したものではなく他所から運ばれたと考えられる。土塁裾には土塁と平行する溝 SD03 が検出された。溝から戦国期の土師器皿と、須恵



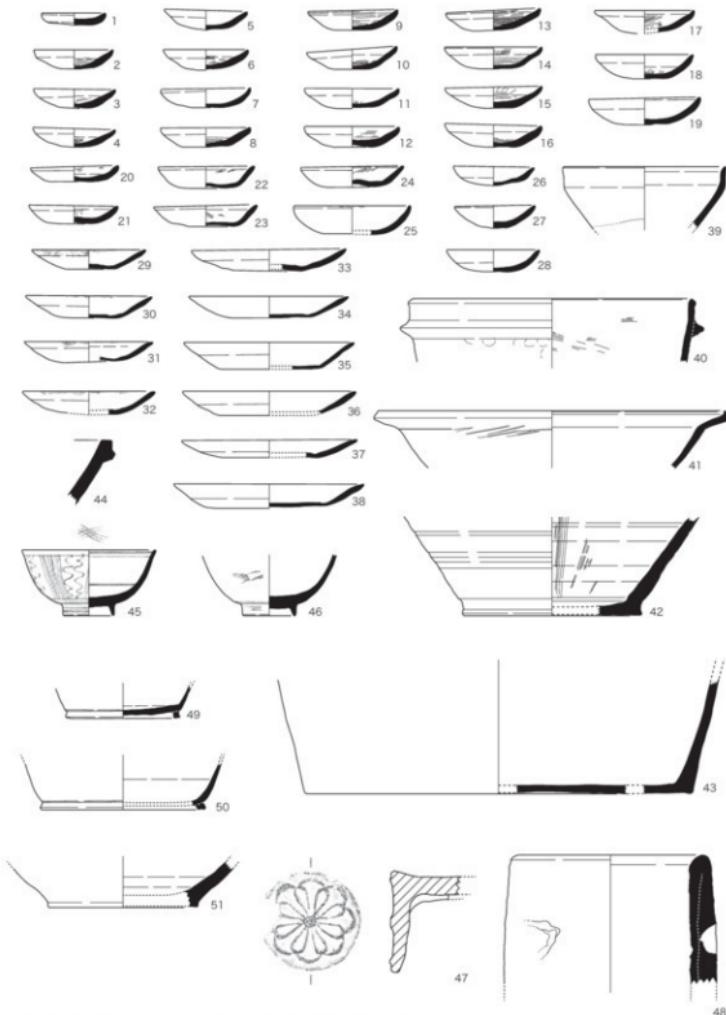
第9図 5トレンチ検出遺構図・土層図 (1/80)

器、陶器などが出土した。溝底の標高は13.8m。

5トレンチ 東西土塁を通り抜けた土橋の前面に設定する。地形測量図によると、土塁部分の密な等高線は、土橋を出した付近で疎らとなり、本地点はやや小高い平坦地に見える。調査では、溝SD04から中世の遺物や集石を確認したが、相当に堆積層が厚いと予想されたため断ち割りで下層の状況を確認した。それによると、北壁の表土直下から切り込む大きな掘形内には、多量の石礫が含まれており、同じく東壁では多量の石礫が北から南へ傾斜する状況が判明した（第9～24層）。さらに、地山面から土塁と平行する溝SD05を検出し、中から戦国期の土師器皿などが出土した。このような多量の石礫を含む堆積層は、少なくとも溝SD05が埋まった後に被覆したものであり、城の改修との関連が注目される。

4 出土遺物

今回の調査で出土した遺物は、整理コンテナに3箱である。土師器、須恵器、瓦器、陶磁器、瓦、土製品などがある。1トレンチは、空堀の隅付近から土師器皿と瓦器羽釜が出土した。土師器皿（第10図1～19）。1は、口径5.3cmで最小。口縁部に油煙が付着する。2～19は、口径6.7



1~38・41 — 土器類 39・42・51 — 陶器 40・43 — 瓦器 44 — 石製品
45・46 — 漆付 47 — 瓦 48 — 土製品 49・50 — 頭蓋器

1~19・40~1~1トレンチ空掘 47~2トレンチ SK01 41・44・45・46・48・49~3トレンチ埋め戻し土
20~24・30~37~4トレンチ SD03 50~51~4トレンチ埋め戻し土 25~29・38~5トレンチ SD05 39~42・43~5トレンチ SD04



第10図 出土遺物実測図(1/4)

～9.2cm、器高1.6cm～2.3cm。乙訓地域で一般的な皿である。16世紀中頃に比定される。内面にハケメ調整が残り、口縁部は歪んでいる。瓦器羽釜（40）は、口径23.0cm。内外面は摩滅する。16世紀代。2トレンチは、石や瓦を廃棄した穴SK01から出土。小振りの軒丸瓦（47）は、8葉の花弁を重ねた文様。土壙上の祠に葺かれたものか。3トレンチは、空堀の埋め戻し土から出土した。須恵器杯（49）、滑石製石鍋（44）、土師器焰烙（41）と染付碗（45・46）、増堀（48）がある。41は、口径28.4cm。17世紀代中頃。46は、見込みの釉を蛇ノ目状に剥ぐ。外面灰白色〈2.5Y8/2〉。内面灰白色〈7.5Y7/1〉。48は、鋳物師の活動を物語る遺物である。このほか、稻荷社に関する狐像、布袋像、土瓶などが出土した。江戸時代後期。4トレンチは、土壙据を埋め戻した石礎内から須恵器鉢B（50）と須恵器鉢（51）が出土した。土師器皿（20～24・30～37）は、溝SD03から出土した。20～24は、口径7～8cm台。30～32は、口径10cm台。口縁部に油煙が付着する。33～37は、口径12.7～14.4cm。京都産の白色系皿である。色調は灰白色〈2.5Y8/2〉。16世紀中頃の所産。5トレンチは、溝SD04から出土した天目茶碗（39）、陶器擂鉢（42）、瓦器鉢（43）がある。溝SD05からは、乙訓地域で一般的な土師器皿（25～28）と京都産の白色系皿（29・38）が出土。16世紀中頃に比定される。

5　まとめ

今回の調査では、昨年度に初めて確認された土壙構築以前に段丘礎層を掘削する掘り込みSD02の規模を確認することができた。細川藤孝による元亀2(1571)年の城の大改修の実態が明らかになるとともに、「かうたにしろ」の字名から想定される神足氏の神足城に迫る大きな発見となった。一方、東西土壙の南側から検出された土壙と平行する溝を覆う土砂や石礎は、城の改修時に移動再堆積したものであり、かなり大がかりな土木事業であったことがわかる。溝から出土した土師器皿は京都産の白色系皿が含まれており、その特徴から16世紀中頃に比定される。⁽³⁾同様に埋め戻された溝は右京第631次調査でも確認している。おそらく、細川藤孝の改修時に懇構を持つ城へと再編される過程で当地一帯に存在した神足城の不要となった溝などを埋め戻したと推察される。なお、調査終了後の公園整備工事中に、土壙南側の擁壁工事で立会調査を実施した。今後は、これまでの調査成果を総括してまとめを刊行したい。

調査中は、大阪大学名誉教授村田修三氏、滋賀県立大学教授中井均氏にご指導とご教示をいただいた。

注1) 岩崎 誠「勝龍寺城発掘調査報告」『長岡京市センター報告書』第6集 1991年

2) 岩崎 誠「長岡京跡右京第1060次調査概要」『長岡京市報告書』第66冊 2014年

3) 原 秀樹「長岡京跡右京第631次調査概要」『長岡京市報告書』第41冊 2000年

第2章 井ノ内車塚古墳第7次調査概要 —長岡京跡右京第1092次(7ANGKT-8地区)調査—

1 はじめに

- 1 本報告は、平成26(2014)年8月28日から10月17日まで、長岡京市井ノ内向井芝4において実施した、井ノ内車塚古墳第7次調査(長岡京跡右京第1092次調査)に関するものである。
- 2 調査は、井ノ内車塚古墳の墳形や規模などを確認する目的で実施したもので、調査面積は78m²である。
- 3 調査地は、長岡京跡の右京二条四坊十五町にもあたるため、長岡京に関わる遺構、遺物の確認も合わせて行った。
- 4 発掘調査は、平成26年度国庫補助事業として長岡京市教育委員会から委託を受けた公益財団法人長岡京市埋蔵文化財センターが実施したもので、現地調査は中島皆夫が担当した。
- 5 発掘調査にあたっては、土地所有者をはじめ、周辺地権者の方々や関係機関に種々のご理解とご協力を賜った。
- 6 調査においては、都出比呂志氏(埋蔵文化財センター専門委員)をはじめ、専門の諸先生方からご指導を賜った。
- 7 本報告の編集と執筆は中島が行った。



第11図 発掘調査位置図(1/5000)

2 調査経過

井ノ内車塚古墳の概要

井ノ内車塚古墳では、測量調査を含めれば6次の調査が実施されている。第6次調査までの成果から、これまでに確認されている井ノ内車塚古墳の概要を以下に列記する。

- ・後期の前方後円墳

- ・規模 全長約39m、後円部の直径約24m、前方部長約17m、前方部幅約26m
くびれ部幅約17m

- ・主体部 木棺直葬と推定される

- ・外表施設 段築なし、葺石なし、埴輪、後円部の南西側に盛土構築部、周溝なしし周濠

- ・埴輪 須恵質、普通円筒埴輪（3条突帯4段）・朝顔形円筒埴輪

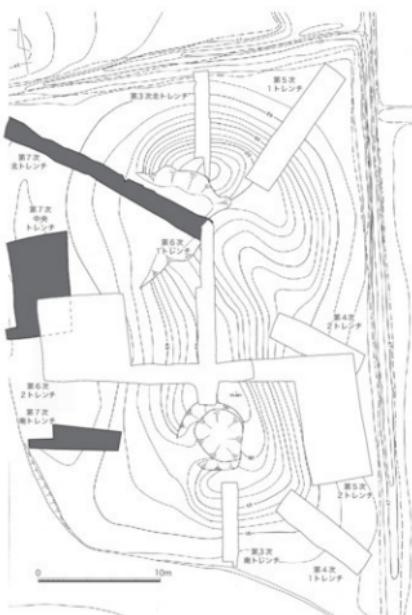
- 形象埴輪（家形・蓋形・盾形・巫女形・馬形・犬形・石見型）

- ・土器 須恵器（TK10型式）、韓式系土器

調査の目的

本調査は第6次調査までの成果を踏まえ、以下の3点を主要な目的として実施した。

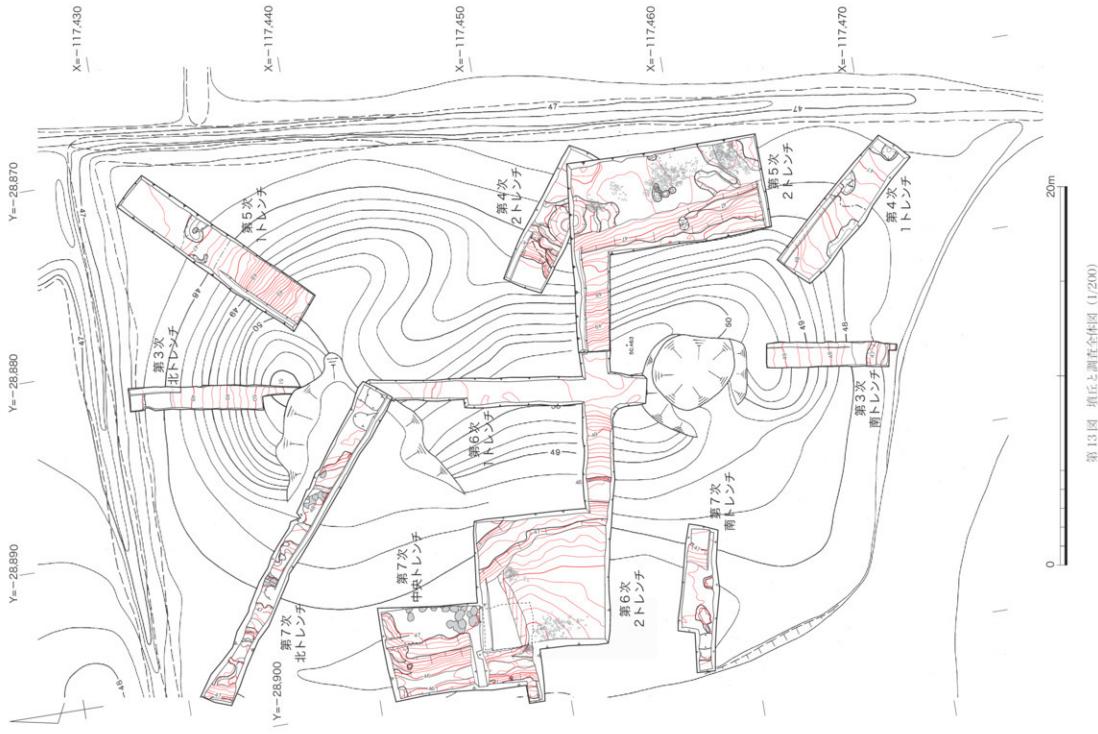
- ・井ノ内車塚古墳の西側を中心とした部分の規模と形状の確認
- ・第6次調査の後円部南西側で発見された盛土構築部の性格解明
- ・主体部に関わる情報の収集



第12図 調査区配置図(1/400)

付表-2 井ノ内車塚古墳の調査履歴

調査次数	調査年度	後円部		くびれ部		前方部		
		頂部	斜面	裾部	斜面	裾部	頂部	斜面
1	1967	測量調査						
2	1997	測量調査						
3	1999							
4	2011							
5	2012							
6	2013							
7	2014							



第13図 墳丘と調査各点図 (1/200)

調査区の設定（第12・13図、付表-2）

北トレンチ 北トレンチは後円部のほぼ中央から墳丘外の北西部にかけて設定した。幅約1.5m、長さ約18mの細長い調査区で、現地表の比高は約1.7mを測る。

井ノ内車塚古墳の後円部は中央部から西側と南東側へ大きく崩されている。これまでの調査では、第3次調査で現状の最高所を含むトレンチが設けられ、さらに搅乱坑の壁面が精査されている。また、第6次調査では後円部から前方部にかけての墳丘主軸上にトレンチが設けられた。しかし、これらの調査区では主体部に関する情報は全く得られていない。北トレンチでは主体部痕跡の有無を確かめるため、搅乱坑の底部に調査区を設けた。また、墳丘北西側の状況を併せて確認するため、敷地境界付近まで延びる細長い調査区としている。

中央トレンチ 中央トレンチは後円部の南西外側に設定した調査区で、東西幅約5m、南北長約8mを測る。現地表の状況は西側への傾斜が僅かに認められるものの、ほぼ平坦であった。

第6次調査2トレンチでは、それまで全く予見されていなかった後円部の南西部に取り付く盛土構築部が発見されており、中央トレンチはその性格解明が最も大きな課題であった。そのため、調査区は第6次調査2トレンチの北西部と部分的に重複するように設定している。また、盛土構築部の裾部は現地表面下約1.6mで確認されており、墳丘外側の地山との関係を明らかにする必要があった。このため、地山面の高さを明らかにする目的で、中央トレンチの南西隅を約1m西へ拡張した。

南トレンチ 南トレンチは前方部西側面の中央裾部から外側に設定した調査区で、幅約1.5m、東西長約5.5m、現地表の比高は約0.5mを測る。この調査区では、これまで前方部西側面の調査成果が不足していたため、前方部端への開きなど墳丘範囲の確認が主目的であった。

調査経過

調査は、平成26（2014）年8月28日から実施した。10月9日に関係者説明会を開催し、翌10日から埋め戻し作業を行った。器材撤去など全ての作業が終了したのは10月17日であった。



第14図 中央トレンチ作業風景（南から）



第15図 中央トレンチ埋め戻し風景（南西から）

3 検出遺構

北トレント（第16～18図）

主体部の痕跡 東半部で主体部痕跡の有無を確認するため、平面およびトレント壁面を慎重に精査した。しかし、墓壇状の掘り込みや礫の分布など主体部にかかる情報は得られなかつた。

後円部の北西斜面 トレントの北西部で地山を検出した。地山は溝状を呈し、トレント北西隅で明瞭に立ち上がっていたため、この部分に周溝を想定した。後円部北西斜面の墳丘裾は、地山の墳丘側への傾斜状況から、トレント北西隅より南西へ約4.5mの位置に想定することができる。ただ、想定した裾部の位置については、これまでの後円部裾推定ラインより外側であること、狭小な調査範囲であり後世の搅乱による亂れも予想される。墳丘裾部を厳密に復元するためには、後円部西側をより広範囲に調査し検討する必要があるだろう。なお、後円部の北西斜面は後世の搅乱などによって乱されており、本来の傾斜など古墳表面の状況を明らかにできなかつた。

後円部北西側の周溝 今回確認することができた周溝は、幅約4.5m、深さ0.7m前後を測る。周溝底の高さは標高46.5m前後で、造り出し周辺の周溝底より約70cm高いことが分かつた。

後円部の盛土 後円部は、想定した裾部より0.8m程度高い、標高約47.3mまでが地山の削り出しで、それより上は盛土によって築かれていた。墳丘盛土には地山由来の黄色土が主体となる層と黒褐色の層などが認められる。

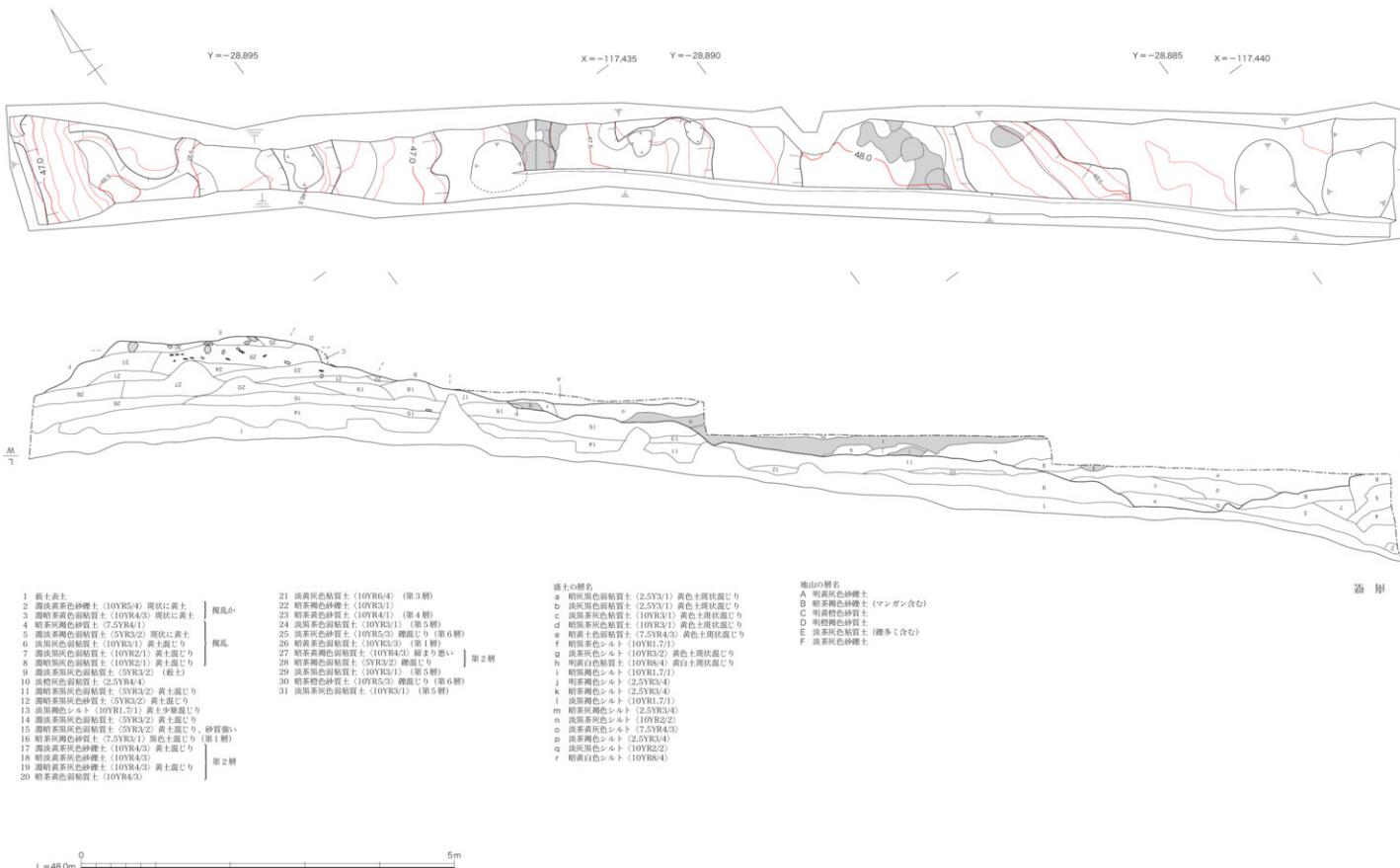
周溝埋没状況と埴輪 周溝の掘削作業では第18図に示した第1～6層に分けて遺物の取り上げを行つた。これは周溝の埋没状況を後述する中央トレントと比較するためであり、近世頃の竹藪客土（第1層）、混じりの少ない黄灰色粘質土（第3層）などに共通する性格が認められた。なお、詳細は中央トレントを参照されたい。埴輪は、トレントの北西端から約6mまでの範囲内で、第5層の下半を中心に一定量が出土している。比較的大きな破片も散見されることから、後円部北西側から転落したものと考えられる。



第16図 北トレント東半部の状況（東から）



第17図 北トレント西辺部の状況（北西から）



第18図 北トレーナ横断構造図・土壌図 (1/50)

中央トレンチ（第19～22図）

造り出し 調査の結果、第6次調査で発見された後円部南西側の盛土構築部は、後円部南西側から西くびれ部の間にかけて突出する「造り出し」であることが明らかになった。

造り出しの規模は、上面の標高が約47mを測ること、トレンチ北東隅で後円部との接続部分と考えられる箇所を検出していることなどから、上面の南北幅が約5m、南西側への突出が2.5m程度と推定できる。また、造り出し裾部の規模については、南北の幅約8m、南西側への突出を約4.5mと推定した。西側の周溝底から造り出し上面までの高さは1.2mであった。なお、原位置を留める埴輪や埴輪掘形が検出されていないことから、古墳築造当時の造り出し上面は失われているものと考えられる。

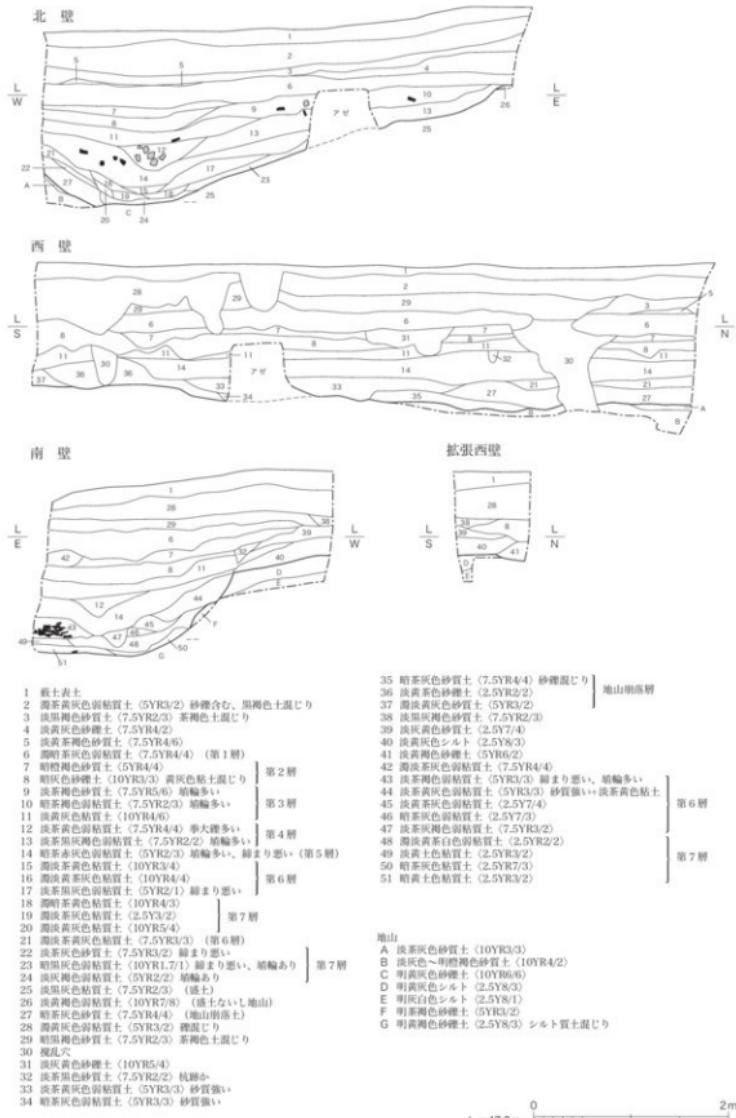
造り出しの盛土 井ノ内車塚古墳の造り出しは、全て盛土によって構築されている。造り出し下半部では、前面を土手状に厚く施した後、その内側に充填する状況が認められた。また、造り出しの上面では、盛土充填時の単位と考えられる長軸50cm程度の楕円形ブロックを確認している。盛土には地山由来の黄色土が主体となる層と黒褐色の層などが認められる。

造り出し周辺の地山 後円部南西側に突出する造り出しは、その前面が底部幅約1mの周溝によって外部から切り離されていた。中央トレンチではトレンチ南西部を拡張したことによって、古墳周溝より西側の地山面を明らかにすることができた。地山面は標高約46.8mの高さで確認されており、造り出し周辺では深さ約1m以上の掘削が行われたことが分かる。

造り出し西辺の周溝底は、標高45.7～45.9mを測る。これに対し、過去の調査で確認され



第19図 中央トレンチ北壁西半の状況（南から）



第20図 中央トレント土壤剖面図 (1/50)

第21図 第6次調査2トレンチ・第7次調査中央トレンチ検出断面図 (1/50)



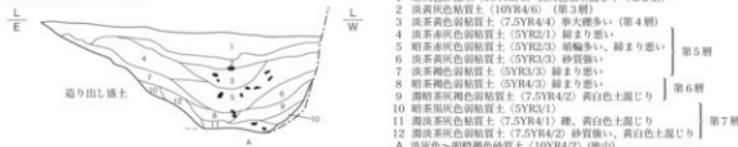
ている埴丘の裾部高は46.5～47.4m（主軸上の後円部端約47.4m、後円部北東部約46.9m、東側くびれ部46.5m前後、前方部南東隅47m前後、主軸上の前方部端約47.1m）である（第13図）。また、今回、後円部と前方部に設けた北・南トレンチの周溝底は、造り出し周辺よりも70cm高い。さらに、第6次調査2トレンチでは、造り出し南西隅から前方部に向かって周溝底が緩やかに立ち上がる状況が明らかにされている（第21図）。これらのことから古墳築造に伴う地山の掘削は、造り出し周辺だけを深く掘削したものと推測できる。このような造作は、造り出しの高さを強調するとともに、築造に際する省力化を図るためのものであろう。

埴輪 今回の調査でも、造り出し西側の周溝内から大量の埴輪が出土した。出土遺物の本格的な洗浄作業に着手していないため詳細は明らかでないが、家形埴輪や動物形埴輪の脚部と考えられる破片も出土している。円筒埴輪は須恵質の硬質な焼き上がりのものが大半であるが、形象埴輪には橙色を呈する異なった様相の破片が目立つ。

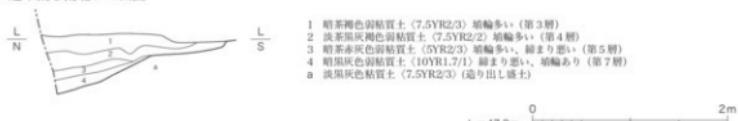
造り出し東西アゼ南面



造り出し東西アゼ北面



造り出し南北アゼ西面



第22図 中央トレンチ造り出し土層図 (1/50)

なお、調査では1m方眼の区画毎に遺物の取り上げを行った。今後の整理作業において、埴輪の面的な過多、形象埴輪など器種毎の分布状況などを明らかにしたい。

造り出しの埋没状況 造り出し西側の周溝部における土層観察からは、造り出し埋没状況の一端を知ることができた。北半部では周溝斜面に地山から流れた土が認められた。周溝底部の堆積層（第20図第7層）は黄色系の粘質土を主体とするが、その性質からは周溝内の恒常的な滯水は認められない。また、より上位の堆積に比べ第7層の出土遺物は少なかった。第7層の上には茶灰色から茶褐色を呈する土層が厚く堆積している（第5・6層）。これらの層には多くの遺物を含むが、特に第5層の造り出し西側で大量の埴輪が出土している。第4層としたものは比較的明るい茶黄色で、造り出し西側ではその堆積範囲が溝状を呈する。第4層には埴輪とともに、少量ながら平安時代から中世にかけての土師器、須恵器、瓦器が含まれていた。第4層までの堆積で造り出しの下半が完全に埋没していることから、中世以前に古墳周辺の大規模な改変が行われたと考えられる。第3層のIIは混じりの少ない黄灰色粘質土で、この層にはほとんど遺物が含まれていない。他の堆積層と異なる状況であるため、周溝を埋めるために他所からもたらされたものとも考えられる。第2・3層によって造り出しあは完全に埋没し、その上は近世頃の竹藪客土（第1層）となる。検出した造り出し上面は第1層直下であり、造り出しを含む墳丘西側の削平が比較的新しい時期に行われたと推測できる。

南トレンチ（第23～25図）

前方部西側の盛土 トレンチの東端から西約2mまでの範囲で、前方部西側面の墳丘盛土を確認した。墳丘盛土の西端は、確認した位置や後述する周溝底部の状況などから、本来の前方部西側面裾部ではなく後世に削平された状態と考えられる。盛土には、後円部と同様に地山由来の黄

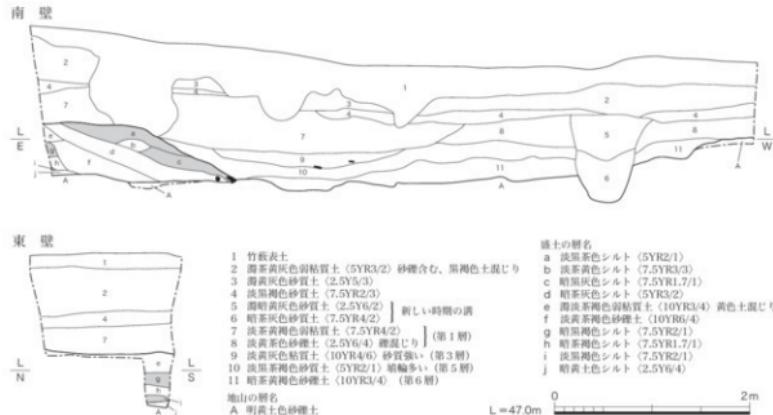


第23図 南トレンチ北壁の状況（北西から）

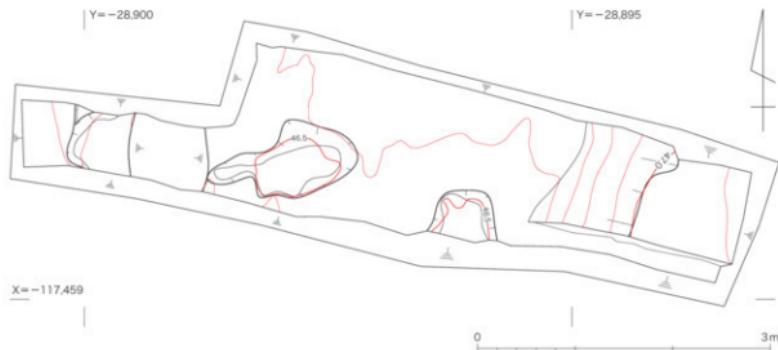
色土が主体となる層と黒褐色の層などが認められる。

前方部西側の周溝 後円部や造り出し部の状況と異なり、周溝の立ち上がりが不明瞭で、地山は緩やかに西側へ立ち上がっていた。周溝の底部にあたる地山面の高さは標高46.5m前後を測る。後円部周溝とはほぼ同じ高さで、造り出し周辺の周溝底より約70cm高いことが分かった。

周溝埋没状況と埴輪 北・中央トレンチと同様に近世頃の竹蔽客土（第1層）、混じりの少ない黄灰色粘質土（第3層）が堆積している。しかし、中央トレンチの第2・4・7層に相当する堆積は認識できなかった。埴輪は、第5・6層の東半から多く出土している。円筒埴輪片が一定量出土し比較的大きな破片も認められることから、前方部西側から転落したものと考えられる。なお、出土した埴輪に形象埴輪はほとんど含まれていなかった。



第24図 南トレンチ土層図 (1/50)



第25図 南トレンチ検出遺構図 (1/50)

4 まとめ

井ノ内車塚古墳はこれまでの発掘調査によって、およその墳形や規模、盛土の状況、そして、円筒埴輪だけでなく石見型、犬形、巫女形など多彩な形象埴輪を持つことが明らかとなっている。こうした調査成果を基礎とした今回の第7次調査では、以下のような成果を取ることができた。

- ① 第6次調査で検出されていた後円部南西側の盛土構築部が、造り出しであることを確認した。また、造り出し西辺の裾部を検出し、その規模を推定することができた。
- ② 後円部の北西側、造り出しの西側、前方部西側で周溝を確認した。
- ③ 造り出し周辺の周溝が、それ以外の部分より深く掘削されている可能性を示すことができた。
- ④ 後円部北西側、前方部西側の埴丘構築状況を明らかにした。
- ⑤ 新たに大量の埴輪資料が得られた。また、後円部北西側、前方部西側（前方部南西隅近く）においても一定量の埴輪が出土している。

特に、西側造り出しと西側に周溝を備えることが明らかとなった点は、井ノ内車塚古墳の復元やその性格を検討する上で非常に重要な成果と言える。また一方で、造り出しや周溝の存在は、第5次調査までの主に埴丘東半部における調査成果との整合性という課題を残すことになった。



第26図 向日丘陵から井ノ内地域の竹藪を望む（北東から）

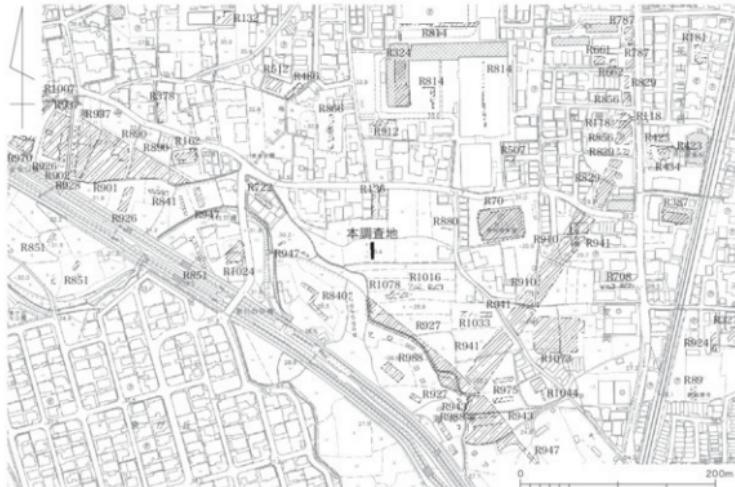
第3章 長岡京跡右京第1097次(7ANOOD-15地区)調査概要 —長岡京跡右京八条三坊十六町、伊賀寺遺跡—

1 はじめに

- 1 本報告は、平成26(2014)年11月4日から11月26日まで、京都府長岡京市下海印寺下内田23番地において実施した長岡京跡右京第1097次調査に関するものである。
- 2 調査は、縄文時代から中世に至る複合遺跡である伊賀寺遺跡の範囲および長岡京跡右京八条三坊十六町に関わる遺構・遺物の有無などを確認する目的で実施したもので、調査面積は56nfであった。
- 3 発掘調査は、平成26年度国庫補助事業として長岡京市教育委員会が主体となり、教育委員会から委託を受けた公益財團法人長岡京市埋蔵文化財センターが実施したものである。現地調査は、埋蔵文化財センター事務局次長の山本輝雄が担当した。
- 4 発掘調査にあたっては、土地所有者をはじめ、周辺地権者の方々や関係機関に種々のご理解とご協力を賜った。
- 5 発掘調査の編集と執筆は、山本が行った。

2 調査経過

長岡京市の南部地域に所在する伊賀寺遺跡は、昭和56(1981)年の長岡京跡右京第70次調



第27図 発掘調査位置図(1/5000)

査で発見されて以来、縄文時代から中世にかけての複合遺跡として知られている。特に、平成15（2003）年から始められた京都第二外環状道路（京都縦貫自動車道）や、それに関わる府道の敷設工事に伴う数多くの発掘調査によって、特に縄文時代の中期と後期の堅穴建物をはじめ、火葬墓や土壙墓、そして玉作に関わる遺物などが確認され、京都府を代表する縄文集落跡として一躍注目を受けることになった。自動車道のインターチェンジや阪急京都線の西山天王山駅新設に伴う開発が今後進展する可能性もあるため、長岡京市教育委員会では、そうした伊賀寺遺跡の重要性に鑑み、遺跡を保存するためその範囲や内容を確認する目的の発掘調査を平成21（2009）年度より継続的に進めてきた。

今回の調査は、その6回目に相当するが、調査にあたっては、幅3m、長さ17mの南北に細長い調査区を設定し、11月4日より重機で耕作土と床土などを除去し、翌5日から作業員を動員して人力で掘り下げを行った。調査の結果、北から南に向かって緩やかに傾斜する斜面と、その上に堆積した遺物を含む複数の堆積層を確認するとともに、縄文時代および奈良時代と考えられるいくつかの小穴を確認することができた。そして、遺構の実測作業や写真撮影を行った後の11月26日に埋め戻しを行い、現地での調査をすべて終了した。調査期間中の11月21日には、土地所有者や近隣の方々および当センター役員を対象とした関係者説明会を開催したところ、12名の参加者を得た。

ちなみに、調査区心の国土座標値はX=-120,497.5、Y=-28,439である。

3 検出遺構

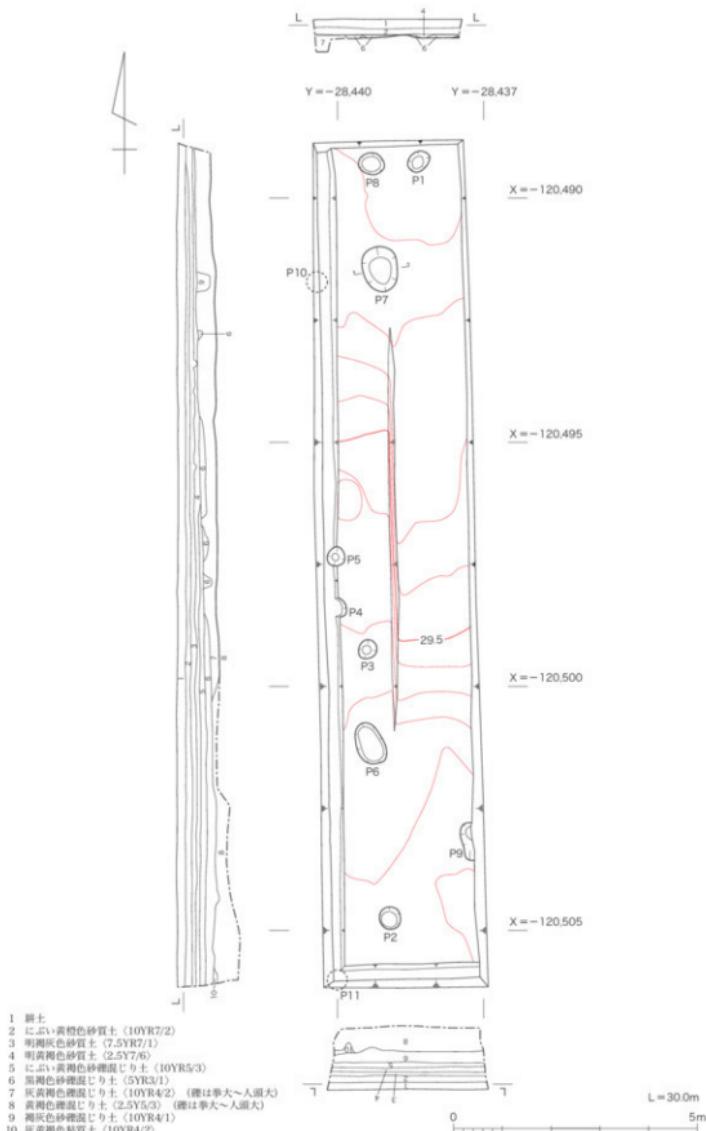
層序 調査区内の基本層序は、上から耕作土、にぶい黄橙色砂質土層、明褐灰色砂質土層、明



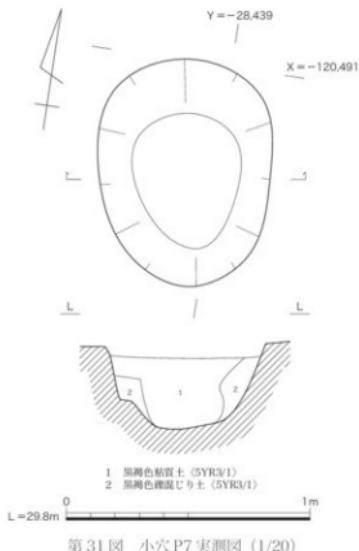
第28図 発掘調査前風景（南東から）



第29図 発掘作業風景（南南西から）



第30図 調査区検出遺構図・土層図 (1/100)



第31図 小穴P7実測図(1/20)

あるが、出土した遺物は乏しく、明確な時期を決め難いものが多い。また、建物や柵として並ぶものは確認できなかった。そのうちP1は、埋土の様相から中世のものと考えられ、またP11は縄文時代の可能性が推察できる。この他、最も大きなP7は、長さ0.93m、幅0.7m、深さ0.35mほどの南北に長い小判型で、黒褐色粘質土と黒褐色疊混じり土が堆積していた。埋土からは、土師器、須恵器、製塙土器など飛鳥～奈良時代の遺物の他、打製石器なども出土している。

4 出土遺物

今回の調査では、縄文土器、土師器、須恵器、綠釉陶器、製塙土器、陶磁器、石器など各時代、各種類の遺物が整理箱に2箱程度出土している。その大半を占めているのは、飛鳥～奈良時代の土師器と須恵器であり、中世や平安時代の遺物の出土量はそれほど多くなく、縄文時代に至っては微量である。遺物の洗浄など整理作業が全く行われていないため、遺物の詳細については、今後に期することにしたい。

5まとめ

今回の調査では、中世から奈良時代までの遺物を含む堆積層と、飛鳥～奈良時代に比定できる小穴を確認することができた。こうした遺構・遺物の確認により、奈良時代の集落が当地にまで広がっていることが明らかになったことは重要な成果である。また、縄文時代の遺構・遺物はごくわずかしか確認できなかつたが、これを積極的に評価して縄文集落も広がるものと推察したい。

黄褐色砂質土層、にぶい黄褐色砂疊混じり土層、黒褐色砂疊混じり土層の順で堆積し、灰黄褐色疊混じり土層と黄褐色疊混じり土層の地山面に至っていた。明黄褐色砂質土層には土師器や須恵器、瓦器など中世の遺物が、またにぶい黄褐色疊混じり土層には土師器、須恵器、綠釉陶器など平安時代の遺物が、そして黒褐色砂疊混じり土層には土師器、須恵器、製塙土器など飛鳥～奈良時代と考えられる遺物を包含していた。地山を構成する土層中には、拳大から人頭大もある礫を多量に含んでいた。土石流などの影響で堆積したものなのであろうか。遺構は、すべて地山面において検出した。

遺構 今回の調査では、小穴を9基程度確認することができた。小穴は、P7を除くと径0.4～0.5m前後の梢円形を呈するもので

図 版



1 トレンチ土塁内に埋没する溝 SD02 と空堀（南東から）

長岡京跡右京第 1084 次調査

図版一



(1) 2 トレンチ土坑 SK01 の石礫 (西から)



(2) 3 トレンチ空堀内の埋め戻し土 (北西から)

長岡京跡右京第 1084 次調査

図版三



3 トレンチ空堀の南壁と東壁土層（北西から）

長岡京跡右京第 1084 次調査

図版四



4 トレンチ土塁構築土と南裾の溝 SD03（南から）



(1) 5トレンチ石礫の堆積状況（南西から）



(2) 5トレンチ石礫の堆積状況（北西から）

井ノ内車塚古墳第7次（長岡京跡右京第1092次）調査

図版六



(1) 井ノ内車塚古墳全景（北西から）



(2) 中央トレンチと北トレンチ（南西から）

井ノ内車塚古墳第7次（長岡京跡右京第1092次）調査

図版七



(1) 北トレンチ完掘状況（北西から）



(2) 北トレンチ完掘状況（南東から）



(3) 北トレンチ盛土と周溝（南東から）



(4) 北トレンチ周溝遺物出土状況（南東から）

井ノ内車塚古墳第7次（長岡京跡右京第1092次）調査

図版八



(1) 中央トレンチ完掘状況（南から）



(2) 中央トレンチ完掘状況（北東から）



(3) 中央トレンチ完掘状況（南西から）

井ノ内車塚古墳第7次（長岡京跡右京第1092次）調査

図版九



(1) 中央トレンチ造り出し上面と西辺（北から）



(2) 中央トレンチ北辺の埋土（南西から）



(3) 中央トレンチ南辺の周溝埋土（北東から）

井ノ内車塚古墳第7次（長岡京跡右京第1092次）調査

図版一〇



(1) 中央トレンチ造り出し盛土と周溝埋土（南から）



(2) 中央トレンチ遺物出土状況（北から）



(3) 中央トレンチ遺物出土状況（北から）

井ノ内車塚古墳第7次（長岡京跡右京第1092次）調査

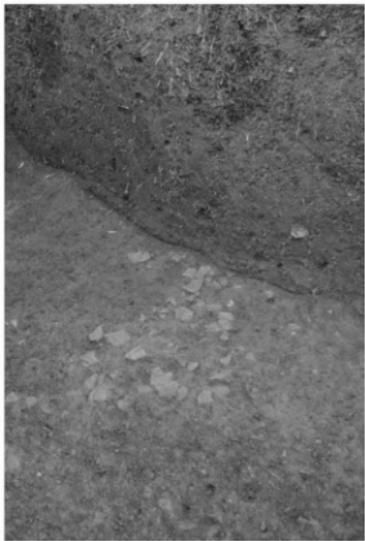
図版一



(1) 南トレンチ完掘状況（北東から）



(2) 南トレンチ完掘状況（西から）



(3) 南トレンチ周溝遺物出土状況（北から）

長岡京跡右京第 1097 次調査

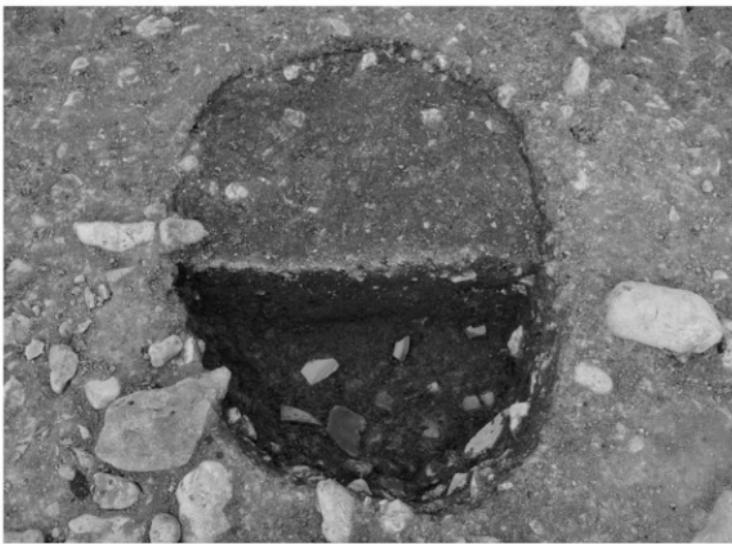
図版
一一



(1) 調査区全景（南から）



(2) 調査区全景（北から）



(3) 小穴 P7 遺物出土状況（南から）

長岡京市文化財調査報告書 第68冊

平成27（2015）年3月16日 発行

編 集 公益財団法人 長岡京市埋蔵文化財センター

〒617-0853 京都府長岡京市奥海印寺東条10番地の1

電話 075-955-3622 FAX 075-951-0427

発 行 長岡京市教育委員会

〒617-0851 京都府長岡京市開田一丁目1-1

電話 075-951-2121（代）

印 刷 三星商事印刷株式会社

〒604-0093 京都府京都市中京区新町通竹屋町下る

弁財天町300

電話 075-256-0961（代）FAX 075-231-7141